

「亡き人を偲びつつ、如来のみおしえに遇いたてまつる」

羽部 玲子

先月、入院治療されていた80代の男性の方が亡くなられました。葬儀式場の都合で、通夜は亡くなられてから4日後、葬儀は5日後に行われました。

葬儀が終わった翌日、その男性の奥さんに、「亡くなられてからお葬式まで日にちがあって大変だったでしょう」と言葉をかけると、「そうですね。でも家でゆっくり主人と過ごすことができました。毎日そばにいて、主人の顔を見て、一緒にいられる事ができてよかったです。あの人にもいてあげる事ができてよかったです」とおっしゃいました。

最近では、亡くなられるとその夜に通夜をつとめられたり、また病気で亡くなられると、家へ帰る事なく、直接葬儀式場となるセレモニー会場へ行かれるような事も見受けるようになってきました。各御家庭において、いろいろと諸事情をかかえていらっしゃる方もおありで、このようなケースを取らざるを得ないという場合もあるかと思えます。そんな中、こうして亡くなられた方と、「ゆっくりと大切に過ごす時間があったよかったです」という言葉を耳にすると、何かしら、心に温かみを覚えました。

私たちは、明日がある、明後日がある、まだまだ後があるという「有後心」^{うごしん}に立って生きています。大切な人の死を目の前にして語りかけたり、今までの縁を思い返したりするなど、その人を偲ぶ事によって、我が身である自身自身もいつか必ず死を迎える事になる。そんな「死」と向き合う事によって、今を生きるという事にあらためて気付かされる事があるのではないのでしょうか。

ご法事の読経に先立って読む表白に、「亡き人を偲びつつ、如来のみおしえに遇いたてまつる」とありますように、亡き人は言葉なき言葉となって残れる私たちの生きゆく道を示していただきます。葬儀はそう気付かせていただく大切な法縁の一つと思わせていただいた今回のご縁でした。